

## ～就活していた頃の頭の中～

### まずはじめに…

私が就活をしていた頃、どういった考えで就職先を選べばよいのか分からず不安に陥ったり、自分の選択に自信を持てなくなったりする時期がありました。パンフレットの読者の中にも同じような状況の方がおられるのではないのでしょうか。

そこで、皆さんにとって何が有益な情報であるかと思案した結果、このページでは、「私が厚生労働省数理職を就職先として選んだ理由」この一点に絞って書き、就活当時の頭の中を全てさらけ出してみるのはいかがでしょうかと考えました。私の話を聞いて、悩める就活生の心に少しでも光が差すきっかけになれば本望です。

### 私が今の仕事を選んだ理由

大きく4つに分類しました。

#### <1. 公務員を選んだ理由>

- 両親が公務員でその背中を見て育ってきたので、民間企業に就職するイメージが湧きづらかった。[2]
- 研究室の先輩・同期は、推薦制度を使うなどして民間企業に就職する人がほとんどだったが、自分は何となく人と違うルートを歩みたいと思った。[3]
- 大手企業の研究職等に就くと私を上回る能力をもった同期等がウジャウジャいると危惧し、その中で抜きん出た成果を上げるのは並大抵ではないと思った。その反面、公務員の場合は数理を専門とする職員自体が希少なので、唯一無二の仕事をしているとの感覚を得ながら働けるのではないかと考えた。[8]
- 民間企業のインターンに参加した際、なぜか場の空気に終始馴染むことができず、インターンに取り組むテンションも他の学生と全く違うことを感じ取り、やはり自分の心は公務員に傾いているんだと再認識した。[12]

#### <2. 中央省庁を選んだ理由>

- どうせ一生の大半を費やして働くのであればより多くの人に影響を与えられる仕事に就きたいと思った。中央省庁は全国民に関わる法律・政策を持っているので「もってこい」と感じた。[4]
- 数理的な仕事をメインとしたい一方、パソコンに黙々と向かうだけの日々は面白くないと思い、様々な連絡調整業務も必要とされる仕事に就くことで、働きながらコミュニケーション能力も養えられたらいいと思った。[7]
- 大学のサークルの先輩で中央省庁に勤めている人がいたので省庁を身近に感じられた。また、サークルの同期から「境谷、お前こそ国一（今の国家公務員総合職）向いてるんじゃない?」と言われ、適性の可能性に気づかされた。[9]
- 中央省庁の仕事は大変であることは知っていたが、結局どこに就職したとしても（程度の差こそあれ）決して楽な仕事は存在しないと思ったので、どうせ同じ大変な仕事をやるのなら「やりがい」に重きを置くのが賢明だと判断した。[10]
- 官庁訪問で面接官の方が言った言葉「国民の関心を無関心に変えることが我々の使命」に感銘を受けた。[15]

#### <3. 厚生労働省を選んだ理由>

- 厚生労働省は国民の暮らしに密接した政策を持っているため、大きなやりがいを感じながら働けると思った。[5]
- 社会保障制度をはじめとする様々な行政分野に多大な影響を与える少子高齢化問題に関心があった。[6]
- 私自身、持病の関係で厚生労働省がもつ助成制度の恩恵を受けていたこともあり、【厚生労働省=社会的弱者を救う組織】であると身をもって感じる事ができたことから、そんな組織で自分も働いてみたいと思った。[11]

#### <4. 数理職を選んだ理由>

- 数学がずっと好きだったので、高校・大学で培った数理的素養を活かして社会に幅広く貢献できる仕事に就きたかった。[1]
- 自分が集計・計算した成果が新聞・TV等のメディアに取り上げられることも多いと知り、達成感を得ながら働ける点に魅力を感じた。[13]
- 官庁訪問で面接いただいた数理職の先輩方が心優しく温かな方ばかりで、自分の気質に合っていると思った。[14]

※上記[]内の数字は、最終決断に至るまでの思考を時系列で並べた際の順番を表しています。理由の中には個人的事情や一部偏見も含まれているかと思いますが、そんな人もいるのかといった程度に見てください。

私の場合「より多くの人のためになる仕事」を選ぶことを最優先に考えました。その他「実際にその職場で働くイメージを持てるか」と「その仕事を選んだ理由を周りに堂々と説明できるか」も大事な選択基準でした。是非参考になれば幸いです。

政策統括官付参事官（企画調整担当）付  
審査解析室 総合解析係長

**境谷 秀作**

《経歴》

年金局数理課  
労働基準局賃金課  
を経て現職

